

●小説

〈CHUJOH〉

という酒場

阿刀田高

atohda takashi



振に陥り、肩を叩かれた。若干の退職金を示されて退職を余儀なくされた。

「田代さんなら大丈夫でしょう。英語ができるんだから」

「厳しいですよ」

確かに英語は少しできる。若いころから好きだった。

しかし、どう説明したらよいのだろうか。私の英語力は変わっている。普通ではない。話すことなんか、まるでできないし、読むことは、まあ、できるけれど得意ではない。ただ英語そのものを眺めているのが好きなのだ。英英辞典や英語活用辞典のたぐいを、もちろん原書を含めて次から次へと目を通し、

「へえー、英語って、こういう言い方をするのか——
それが楽しいのだ。」

勤めていた出版社では英語辞書の編集を委ねられていたから厭ではなかったが、こんな英語力は潰しがきかない。無職でいるわけにもいかずに仕事を探したあげく、
「中学生相手の学習塾。英語を教えてくださいよ——」

来週からその仕事が始まる。自信はまったくくない。子どもなんてなにを考えているのかわからないし、扱にくい。はつきり言っている人になにかを教えるより自分で勝手に学んでいるのが好きなのだ。

地下鉄のA7番の改札口を出てエスカレー

ターを上り、すぐ前の横断歩道を渡ると商店街が伸びていた。道幅は七、八メートル、ようやく車がすれちがえるほどだ。右手の歩道をしばらく歩き、

——このへんかな——

洋品店の柱に「南町3-18」と細長に標識が張ってある。

角を曲がった。

そして、もう一度、細い路地の角に立つて奥を探すと、新しい看板に〈CHUJOH〉とあるのが見えた。スマホの地図で調べ、おおよその見当はつけて来たが、すぐに見つかったのは運がよかったからだろう。

木曜日の午後四時…。

一ヵ月ほど前、勤めていた出版社が経営不

——暗いな——

この仕事は長くは続くまい。うつうつと一人暮らしのアパートで膝を抱えてテレビを見ていたら、

「えっ」

懐かしい顔が映った。

初めから気づいたわけではない。

坊さんが酒場をやっているのか——

カウンター・バー。作務衣の男が頭を光らせ、若い女性を相手になにやら楽しそうに談笑している。

——これもありだな——

男の横顔に、額の脇に小さな木の葉のような痣があるのを、このときに認めたかどうかおぼつかない。夕刻に同じリポートが人生相談の一つとして放映され、

——NHKは同じニュースを流すんだ——

と見直したとたん、

——えっ、中条じゃないか——

と旧友の姿をみとめた。

十数年ぶり、もちろん、様子はちがっているが、面影は十分に残っているし、なにより額の痣がそのままだ。

小学校から中学校にかけて群馬の田舎で親しい仲だった。中条二郎はお寺の次男坊で、お父さんは偉い、偉いお坊さんだった。

「偉かないよ、あんな親父」

二郎は父親を尊敬していなかった。私には

わからない。お坊さんにも階級があるだろう。二郎の父親は熱心に修行し、勉強も怠りなく、学僧としておおいに認められていたが（この噂はよく聞いたが）僧侶としての階級はさほどのものではなかったらしい。二郎に言わせれば、

「そりやそうだろ。自分で勉強しているだけなんだから」

栄誉栄達なんか求めてない。ひたすら仏の道を探ねるタイプらしい。それはそれで、

——りっぱじゃないか——

と私は思わないでもなかったが、活動的で娯楽も十分にある二郎とは折り合いがわるかったのだろう。私は英語が好きなことで二郎とよく馬が合った。それとはべつに二郎は旅が好きだった。中学生のときに二度も家を出して、あちこち歩きまわったはずだ。高校を出てから少しお寺で修行をしたはずだが、間もなく道を外し、海外へ飛び出した。それからは世界中を、ひどい生活をしながらほっつき歩いたにちがいない。消息は途絶え、正直なところ、

——あいつ、どうしたかな——

時折、思い出すくらいに友でしかなくなっていた。

それが突然テレビにあらわれたのである。

——お坊さんバーか——

若い人相手に人生を語り合ったりして、見

たところ元気そうだ。

社交性はあるのだし、世界を旅して話題も豊富だろう。もともとお寺の子だし、少しは修行をしたのだから、

——坊さんのまねごとくらい充分にこなせるはずだ——

これも昨今のトレンド……。テレビで紹介するのは時勢に向いているからだろう。それに……なによりも二郎自身が躍動して楽しそうではないか。

——会ってみるか——

私自身ネガティブな心境に陥っていたので明るさがほしかった。二郎なら心安く、しなやかに対応してくれそうだ。わけもなくそんな気がした。

——〈CHUJOH〉っていうのか——

二郎の苗字は「なかじょう」のはず。あえて本名を避けたのだろう。パソコンを覗けばバーのありかは、四時半の開店を含めてすぐにわかった。

午後五時を選んだのは、

——こっちは一日中あいているんだし——

営業の邪魔はしたくなかった。

しかし、バーといいながらもコーヒーや紅茶も用意してあるらしいし、五時が適切な時間かどうかはわからない。

木製のドアに〈CHUJOH〉とあるのを

見て、そっと押し開けた。

「いらっしやい」

声は昔と変わらない。

少し暗いが、テレビで見たままの様子である。茶色のカウンター。作務衣の男と若い女性客が一人、向かいあっている。話しあっている。作務衣はこつちを見て、

「どうぞ」

と笑った。まるで常連客を迎えるようにさりげない。

—— 気づいてないな、私がだれか——

と察して突っ立っていたが：ちがった。作務衣は片手で女性客の話を打ち切り、近づいて来て、

「久しぶり。元気？そこへ座れよ」

とても十数年ぶりの出会いとは思えない。

「まあ、まあ。あんたも元気そうだね」

「俺もまあまあだ。なに飲む？」

まったく屈託がない。

「えーと、ビール、ある？」

「もちろん。少し待って、な」

とビールとグラスを用意しながら女性客に向かう。まだ話が終っていないらしい。

「つまり、あわてるなってことよ」

「ええ」

まさしく人生相談らしい。

「いろはカルタとおんなし。諸行無常、最後はッんぐだ」

と聞こえた。

またこつちに寄って来て、

「これ、群馬の地ビールなんだ。うまいぞ」と注ぐ。

若い女性との会話はさらに四〇五分ほど続いただろうか。

「じゃあ、失礼します」

「うん、またね。いつでも話においでよ」

「ええ。ありがとうございます」

水色のワンピースが出ていくと作務衣は手を拭いながら、

「なんで、急に？」

「テレビで見た。懐かしくて」

「何年ぶりかな」

「十七年、かな」

「おたがいに老けたな」

「仕方ない」

「俺も飲む」

作務衣も：二郎も地ビールの栓を抜いてグラスに注ぐ。四方山話が始まった。昔のまんなまみたいなの：少し異物が挟まっているような：。

「本当に世界中まわったよ。今じゃ行きにくい国なんかも」

「危ないんだろ。イスラム圏とか」

「いや。イスラム教徒はみんな敬虔なんだ」

「うん？」

「宗教はあれでいいんじゃないのか。原理原則に忠実で。殺しちゃいけない、盗んじやいけない、嘘をつくな。世の中が複雑になると、こういうときは殺してもいい、盗んでもいい、嘘も方便、いろんな理屈がついて、ややくしくなる。でも、そういうこと言わないで毎朝毎晩、原理原則を心に命じて、祈って、それが本当の宗教かもしれん。ややこしいのはいかんよ」

「人生相談も、それか」

と、この酒場の特徴を尋ねた。

「いい加減なもんよ、俺がやるんだから。ただ偉い坊さんも言ってる。衆生が言いたがっていることを言わせて、ただ聞けって」

「なるほど」

「聞いてッそうだね」でいいのよ。癌で死にそうな人にはいろんなこと言わないで、ただ手をしっかりと握ってやればいい」

昔から大ざっぱな奴だったが、大ざっぱは大ざっぱなりに成長したらしい。

「なんで「CHUJOH」なのよ、この店？」

「えっ。苗字だよ、知ってるだろ」

「でも、ナカジョウだろ、あんた」

「ああ、それか」

「本名を避けて、ちよつともじったわけ？」

「それもあるけど：ダイジョウ、シヨウジョウって、知ってるよな」

「ダイジョウ？」

「ああ。大乘仏教とか、小乗仏教とか」

「聞いたことはある。専門用語だろ、お坊さんの」

「大乘は大きな舟、小乗は小さな舟。衆生を救うのに、それまでの仏教は小さな舟だったけど、今度は大きな舟だって…。大きな舟のほうが大勢を救える」

「そりやそくだ」

「昔のことよ。インドあたりで派閥抗争があつて、日本に伝わって来たのはみんな大乘仏教だけだ…」

「くわしいな」

「少しは勉強したからな。ただ、もともとの意味はどうあれ、大乘と小乗の区別はいろんなところにあると思うんだ」

「ふーん」

「大乘は大きな舟で広くみんなを救おうって考えだろ。小乗は小さいけど、自分だけはしっかり考えようって…。自己解脱が主眼なんだ。うちの親父なんか自分だけはしっかり勉強をして修行もした。いろいろ考えて悟りくらいえたかもしれないけど、周囲になんの恵みも垂れなかった。坊さんとしては一つの道かもしれないけど、つまらんとさえ言えばつまらん。教えを…自分が会得したい考えを周囲に広めなきゃ社会的には意味がない。大乘と小乗とどっちがいいかってことじゃなく、自分がりっぱにならなきゃ人を救えないし、しかし自分だけがりっぱになつても人は救

えない。いろんなところにこういう二律背反というか、矛盾っていうか、二つの方向性がある」

「ある、ある」

わかるような気がする。

「政治家だつて自分だけ清く、正しく、信念の人つてのは役に立たん。しかし当人がろくでなしじゃ、やっぱりろくな政治はできない」

「なるほど」

「アフリカなんか旅してて、よくそういうこと思つたよ。聖人がどうこうできる国情じゃない。しかし当人が腐つていたら、やっぱりベケよ」

「そうなんだろうな」

「だから、あははは、大乘でもなく小乗でもなく、中乗で行くか」てなもんよ、俺は」

「深い哲学なんだ」

「哲学かな。コンプロマイス、コンプロマイス、だよ、あなたの得意な英語で言えば」

「妥協か」

「そう。それ。妥協して、中乗よ」

さまざまな思案が私の脳裏を駆け抜けて行く。ふと尋ねた。

「親父さん、どうしてる」

「親父？ 死んだ」

「そう。いつ？」

「七、八年前だろ。悟りきつた、いい往生

だつたらしいけど、はつきり言つて自己満足よ。周囲のだれも救わなかった」

「兄さんは？」

「寺を継いでる。いい加減なもんよ。自分を救わないし、周囲も救わん。身過ぎ世過ぎで葬式に精出して」

「それだけかな」

これは…なんとも言えない。

「世界中が…仏教国なんかもひどいめにあつてるのに日本の坊さんたちは、ほとんど知らん顔。うちの兄貴なんか論外だけど、自分自身だけがただ修行してるんじゃ駄目なんじゃないのか、今の世界情勢は」

「うん」

曖昧に頷いたとき店のドアが大きく、にぎやかに開いて数人の女性たちがなだれ込んできた。女子大生だろうか。店は繁盛しているらしい。

「また来るよ」

「ゆっくり話そう」

街には夜が落ちて、ざわめいている。

——俺はどうするか——

自分独りで英語を楽しんでいてよいのか。みんなに知識を広めるべきか。空を見上げると鈍色の雲が笑った。

(あとつだ たかし・小説家)
著書に『怪しくて妖しくて』など